

2017/3/12

(日々雑感 44)

現場レポート

前回の自分の記事は、なんとか最後はソフトランディングさせましたが、読まれる方によっては「本当にそんな気持ちになれるものなの？作り物じゃないの？」というような疑問を抱かれた方もいらっしゃるかもしれないなと思っておりました。

しかし、このような「とんでもない生活」を作り事ではもちろんのこと、古の人々が重んじた我慢や忍耐といったものだけでは、いくらなんでも23年間も続けてこれるわけがありません。そもそもどんな人間でも、そんなことは不可能なのだと思います。ましてや、気が短くこらえ性のないぼくになどに出来るはずもありません。

では、なんで、そんな生活を続けることが出来たのか？

これは、以下に述べることで、上記の質問に対して正確な「対位法」になっているかどうかは分からないのですが、一言で言うと

「そうやっている自分の姿以外は思い浮かばなかった」

とすることです。

しんどい目に遭ったり、いたたまれなくなったり動き回ったり、物を書いたり、何か事業を企てたりする自分の姿は容易に思い浮かべることは出来たのですが、それ以外で、自分がどんなことをしているのか？

その姿が全く思い浮かばなかったのです。

旅行に行ったりとか、遊びに興じたりとかが。

何も事が起こっていないときに、その時間、一体自分は何をしているのか？それが思い浮かばない。

しんどい目に遭ったりしているときなら、そのしんどい現場の、最も近いところから、最も確かだろうと思われることを伝えれば良い。それしか思い浮かばなかった。もちろん今思い返してみると、ですけれども。

それが良いとか悪いとかではなくて、あるいは、そういうことがあるかもしれないとか、それはなんだかとっても変だとか言うことでもなくて、多分それがぼくの生まれ持った「質(たち)」なんじゃないでしょうか。

もちろん数多あった病気というものは、ぼくの一存で経験しようとして出来る物ではない天意そのものなので、それらは省きますが、省いて残った物については、それ以外、目に

入らず、その方向にしか視線が行かなかったということなのだと思います。好きとか嫌いとか、それを経験することで得るとかしないとかではなく、タダそれしか見えていなかったということではないと。

そういう緊張状態に常に身を置いていないと、生きている気がしない、生きがいを感じいない妙な体質としか言いようがないのです。折角産まれてきたのに、上っ面だけで通り過ぎてしまい、大切な物を見落としたまま、タイムアップのベルが鳴って、有無を言わずあの世に行かされる羽目になるのは、実に、実に、口惜しいというか。

とにかくリスクを取りに行く。リスクを負わない安全地帯からの発言は、あっても良いが、リアリティーや人の心を動かす説得性がまるでないという感じ方が常にあるのです。ある意味、極めてリスク選好な「危ないヤツ」なのです。「手応え」を得るためなら、どんなことでもしてしまうからです。

これでは誰もついてこないでしょう。どんなに反省して「穏やかな顔」を装ったとしても。そんな危険負担など、一緒に負えるはずもつきあえるはずもありません。

もうそれは、この生活に入って充分、十重二十重以上に分かっているのです、同じ経験につきあってくれとも、一緒に体験してくれとも言ったりはしません。求めもしません。

ただ、ぼくが自分一人で行ってみてくるから、付いてこなくても良いよ。でも、その代わり帰ってきて話をしたり書いたりしたら、その内容に耳を貸してよね、内容を信じてよね、と言うのが今の正直な気持ちなのです。

そうして、とてもじゃないけどついて行けないし、付いていきたくもないけれど、やっていることは何となく分かるし、している内容にもあまり嘘が感じられないと言う感覚を抱いてくれたりする人が、ほんのわずかでもいて、その感想をちゃんと知らせてくれたらどんなに助かることだろうとは思っています。

(次回 日々雑感 45に続く)

(日々雑感 45)



ところが、そんな淡い望みを抱いて歩いていた昨日、夕暮れ時の交差点で、ぼくとしては

全く普通にぼんやりしながら歩いてたつもりだったんですが、そのぼくの前を、ランドセルを背負った背の高い小学校六年生くらいの女の子二人が横切って行きました。横切られた後、丁度ぼくがその後を付いていく恰好になったのですが、見るとそのうちの一人が、横切りしなにチラとぼくを見た後、隣の子になにやらひそひそ話をし、されたその子が後ろにいるこちらを振り返り、まじまじとぼくを見つめたのです。

「それはいくら何でも失礼だろう！！」と、ぎゅっと目に力を入れて見返えすと、今度はその子が元の子に、なにやら又ひそひそしているので、うざったくなって、一気にその横を追い抜きざまに、心の中で「なんやのん？あんたら？なんか用でもあるんかい？」と上から目線で押さえつけるように見下すと、その子らふたりは、目をそらしもせず更にまじまじとこちらを見上げ続けたのです。

それを捨て置いて、その先ず一と歩みを進めました。進んだ先でふと、そういえば最近変な目でみられることが複数回あるのをうすうす感じてはいた記憶がよみがえり、大人ならまだしも、あろうことか、とうとう小学生にまで、露骨に変な目で見られるほど、押さええている物が押さえられていない、妙な存在になっているらしいことを感じてショックを受けたのです。

「得体の知れない物になっている。しかもそれが物理的に姿に現れている。子供が見てすらはっきり分かるほど、あからさまに」

家人の予防拘束を警察に打診しようとしている自分が、予防拘束される存在になりつつある。

ミイラ取りがミイラになりつつある。本当にショックでした。

可能な限りのレーダーを張って、できうる限りの高いアンテナを立てて姿勢制御をしてきたつもりだったのに、それが全く何の役にも立っていなかった。本当にクソの役にも。

自分の都合を極力排して、自分の都合の善し悪しとは全く別に物事がどう動き、何が起こるかを予測することだけに限って動いてきたつもりなのに、それらの「中庸無私」がまるで働かず、無残にも周りからは「魔物」のように見えているらしい事実には愕然としたのです。

「なんなんだ、こりゃ？何をやっているんだ、俺は？」

そういっても、誰も何も言ってくれるわけではないので、黙るしかありませんでした。

(次回 日々雑感 46 に続く)

(日々雑感 46)



「そもそも一体何でこんなことをしているんだ？こんな「避難生活」を？」

そんな疑問が湧きました。

昔ある知り合いが「迷ったら、元々はじめは、何をしようとしていたのか？そこに戻ってみろよ！」と言っていたことを思い出したからです。

それでやってみました。

家屋、土地、家財の防衛のためかという、なんかあまりそうでもありません。男一人が生きていくだけの上では、却ってこの6畳1Kの方が、メンテナンスは楽だし、暖房効率も良いし、何でも手を伸ばせばすぐに届くところにあるし、で極めて便利は良いのです。ただ風呂の湯船が狭くて身体を十分に伸ばせないことを除いては。

ぼくが、こうまでして、かりそめの「避難生活」をしているのは、暴力を怖れてでもないような気がします。事実、大きな花瓶で頭を割られそうになったときに「殺すなら殺せ。殺されてやる。さあ、やってみろ」と逃げも隠れもしなかったからです。

流石に相手はびびって、花瓶を手から落としましたが。

では、何のために？かという、

「ぼくが死んだら困るよね？だったら金出せよ」とか

「金出さないの？だったら、出すまで出て行かないから」とか

「さっさとこの家売って金、作れよ」とか

「自分は居るだけで有り難い存在だ。だから働く必要はない。好きなことだけやって暮らして良い人間だ」とか

そういうことが絶対に許せないからです。そんな理不尽な事を放置したままでは、示しが付かないからです。「おかしいことをおかしい」というしかないからです。

15年掛けて立ち直り、去年の9月に再起を誓って家を出たはずなのに、今年1月に突如戻ってきたら、豹変していたのです。更に計算づくで「本音本心の爆発」という芝居までして二段打ちで仕掛けてくるようになっていたのです。怒りにまかせた「暴力」は芝居で、その後の「劇的な和解」でお金を引き出そうとしたが、ぼくに見抜かれてしまった。あるいはぼくが乗らなかった。それで開き直って芝居の下にかくされた本音を最後に言った。

それが上述の言。

それで「最早これまで」とぼくの方が家を出た。甘えかかる人間が消えることで、やむなく自立せざるを得ないようにするために。こちらもいつものように最後の最後に「ついつい見ていられなくなって」で、手助けが出来ないように。

しかし、その成果が出ないまま、こちらの方が相手より先におかしくなりかけているのです。わずか50日間でバランス感覚が狂いはじめているのです。弥次郎兵衛の右手と左手の長さにすこしずつ差が出来、どちらかに傾いて、気を抜くとひっくり返りそうになっているのです。良くない状態だと気がついていても、修正方法が分からないのです。

いついつまで頑張れば相手への改善効果が出るからそれまでは、と言うなら頑張りようもありますが、逸れすらもない状況下では、足の踏ん張りようもありません。

最早、説諭説得による覚醒などというレベルはとうの昔に過ぎています。たとえば、金正恩に平和の尊さと国民への奉仕を説いているようなものです。

「それはそうだ！！目が覚めた！！」

何て言うことがあり得るのでしょうか？

言ったもの勝ち、したもの勝ちのごね得は絶対に許せません。

最低でも共倒れによる相殺（そうさい）、イコールゼロくらいに持ち込まないことには、社会がゆがんでしまいます。

前に生きたもののツケは、必ず後に産まれてくるものに影響します。それを看過し、我が世の春だけを謳歌するのは、古の人たちへの裏切りです。受け継いだバトンを知らん顔して隠すようなものです。先代が後代のために用意した物を、自分の時代で全てかすめ取ってしまうようなものです。

そうしないためには、どうしたらいいのか？

まだ、答えが見つかりません。

（次回 日々雑感 47 に続く）

（日々雑感 47）



ASK MYSELF

答えが見つからないと言えば、もう一つ疑問があります。
現在の警察が重んじているものです。

警察は事件解決率を重んじています。どうして犯罪未然予防率の方を今少し重視しないのでしょうか？

事件化すれば、既に加害者と被害者が発生しています。事件前なら加害者も被害者もまだ発生していないのです。犯罪が起こっていないので、犯罪者が発生していないからです。無論被害者もいません。つまり「双方にとっての不幸」を起こさないで済むのです。そのような状態にすることが何故出来ないのか？何故重視されないのか？

経済原則に基づく手間と効率の問題と言われれば、逸れもありかとも思いますが、本当にそれでいいのでしょうか？

疑問です。

確かに未然予防率は効果や成果の数字的立証が難しいのは事実です。なぜなら何事も起こらないのがベストだからです。予防率でなくて発生件数がゼロなのは成果としては見えにくいかもしれませんが、成果に見られないからです。

一方事件解決率は、起きた犯罪の加害者をどれだけ捕まえて事件を終息させるかですから、見えやすいも良いところですよ。起きたか起きないか？起きたらそのうちどれだけ捕まえて、裁いた上で刑務に服させるかだからです。納税者にも分かりやすいのでしょう。大多数の「平時」の納税者が納得すれば、スムーズな予算が獲得でき、組織は安泰になります。

嫌みな言い方をすれば事件の数が多ければ多いほど「お役に立っている感」が、つまり存在感と存在理由がアップするのです。こうなると組織維持のための「犯罪」の側面がかなり色濃く強調されてきます。

最近、ある公的機関の下水道関係の人から、集中豪雨時の濁流管理についてこんな話を聞きました。

「急激に上がった水位を下げるために、堰き止めブロックを破壊する必要があるんですが、当然あまりの濁流にダイナマイトを仕掛けることが出来ないんです。本当に破壊しようと思ったら、コンクリートブロックの根元にダイナマイトを仕掛けないと破碎できません。上に置いて通常の10倍のダイナマイトを仕掛けても無意味なんです。しかし、お上はそれをやれと言ってきた。無駄だと鼻から分かっているけど、市民感情を考慮すると、何もしなかったとは思われたくないので、敢えて無駄と知りつつそう言ってきたわけなんです」と。

そういう物の見方からすると、本当に市民を考えての行動というより、かなり意地の悪い見方をすれば、お役所が、己が組織の維持のために取っている行動なり目標なりがかなりあつたりすると言うことが言えるのではないかとも思ったりもするわけです。

一体僕らは、何をどういう基準で見れば良いのでしょうか？

まず、常識とは、絶対不動のものではなく、「これまでのところ最大公約数的に当てはまってきたもの」ぐらいに見なして、はじめから「ところで、今回もそれが当てはまるの？」ライクに位置づけて、自問自答してみるのもひとつの手かな？とおもうことしきり

な毎日となっておる次第であります。